



第37回 日産 童話と絵本のグランプリ

おとうさんはとまらない はつみ ひろたか

あさ、目がさめると、おとうさんが大きなきかんしゃになっていた。

アニメみたいに、かおがついてたりしない。ほんもののきかんしゃだ。ぼくがもつてるおもちゃとそっくり。

ぼくはこれがおとうさんだつてわかってたから、しゃりんをトントンとたたいた。

「おとうさん、おはよう」

「おはよう。じつはずつとまえからおきていたんだ。かんがえごとをしていてね。これからどうしようかって」

おとうさんは、どんなときだつてこんなふうにおちついてる。そういうところがホント、かっこいい。

おとうさんはまず、はたらいてるかいしゃにでんわをかけようとした。でも、でんわじゃ、きつとわかってもらえないし、そもそもどうやってかけていいかわからない。

「いつてせつめいするしかないか」

「ぼくもついていく！」

「がっこうがあるだろう」

ぼくはぜったいについていくつてきめていた。がっこうなんて、いつてられない。

「しょうがないなあ」

ぼくは、このいえでいちばんおきなまどガラスをはずして、おとうさんを外にでられるようにした。おとうさんがすこしすんだだけで、えんとつがでんじょうをけずり、からだがかべをこわし、しゃりんがゆかをボロボロにした。

シュ、シュ、シュ、シュ。

ふつうのどうろをはしるきかんしゃに、みんなきょうみしんしん。ぼくは、ちよつとだけエラくなつたきがして、まどから手をふつたりした。がっこうにいつて、みんなにじまんしたいけれど、ずるやすみしているからおあずけだ。

かいしゃにつくと、りつぱなヒゲをはやしたしゃちょうさんが、ぱたぱたとはしつてやつてきた。

「いやはや、これはなにごとだ」

おとうさんは、しゃちょうさんにこれまでのことをせつめいした。

「ふむふむ、なるほど。それはたいへんだ。とりあえず、きょうはかいしゃを休みなさい。あしたまでに、きかんしゃがこのかいしゃでなにができるのか、かんがえておこう」

しゃちょうさんはそういつて、ぼくをみてニヤツとわらった。

「なに、わたしもね、まだむすこがいさかつたころ、やきゅうのバットにへんしんしたことがあるんだよ。まあとにかく、あせらないことだ。あせらなければ、ほとんどのことはしぜんとかいけつするんだからね」

しゃちょうさんはガツハツハとわらうと、ぼくにへたくそなウインクをした。ウエッ。

「さて、かいしゃもやすみになったことだし、どこかあそびにでもいくか」

おとうさんがどうろをはしりながらそういつたので、ぼくはうれしくておもわずとびはねた。

「いちにち、ずつと？」

「うん、いちにち、ずつと」

なんていいひなんだ！ ぼくはワクワクしながら、やりたいことをかんがえた。

「そうだ！ あの山のなかをはしつてみようよ！」

「よしきた！」

おとうさんはグンとはしるスピードを上げた。

シュ、シュ、シュ、シュ。

山につくと、おとうさんは木をたおさないようにゆつくりゆつくりのぼつていつた。

まどからリスがはいつてきて、ぼくのかたにとまった。ことりがチュンチュンとでんじょうのところをくるくるとびまわっている。

ぼくはたのしくなつて、おもわずおきな声でうたをうたつた。

「おとうさんもうたおう！」

「おれはへたくそだからなあ」

そういつておとうさんがうたいはじ

めると、ことりやリスはいそいでまどからにげていつた。おとうさんのへたなうた、きいていられなかつたみたい。「つぎは、こうそくどうろにいつてみたい！」

「よしきた！」

こうそくどうろをはしるのははじめてだ。くるまがビュンビュンよこをとおすきいていく。おとうさんはきちょうしているのか、ここでもすこしゆつくりはしつていた。

よこをはしるトラックのまどがあいて、うんでんしているおじさんが、ぼくにはなしかけてきた。

「トンネルのなかに入ったら、まどをしめな」

「どうして？」

おじさんはいじわるなわらいかたをして、はしりさつていつた。

トンネルにはいると、なんだか、いきがくるしい！ ゲホゲホせきがとまらない！

そうか！ おとうさんのえんとつの

けむりが、まどからはいつてきちゃったんだ！

トンネルをぬけると、ぼくのからだとかおは、けむりのせいでまっくろになつてた。おじさん、おしえてくれればいいのに！

そのあと、ぼくたちは川^{かわ}にいった。おとうさんは草^{くさ}のうえですこしきゆうけい。ぼくは、じぶんのからだを川^{かわ}の水であらうと、おとうさんにもかけてあげた。あつくなつたおとうさんからは、フライパンみたいにジュージュー音^{おと}がなつた。

ぼくはおとうさんにどんどん水^{みず}をかけた。するとおとうさんは、すこしすすんで川^{かわ}のなかに入^{はい}つてきた。

ザブーン！

おおきななみがおきて、ぼくは川^{かわ}のなかでぐるんといつかいてんした。

「もういつかいやつて！」

おとうさんはなんともなんともなみをつくつてくれた。ぼくはこうけい、32かい、川^{かわ}のなかでかいてんした。

「そろそろ、いえにかえろうか」

ゆうがたになつて、おとうさんがいった。

ぼくは、へんじをしなかった。

「こんなにたのしかったの、ひさしぶりだな」

「そうか」

「うん。おとうさん、しごとでなかなかあえないから」

ぼくはいいながら、かなしいような、こわいような、よくわからないきもちになつた。

ゆうやけのオレンジいろが、いたいぐらいまぶしい。

ぼくはしつてる。あしたになつたら、おとうさんはにんげんにもどる。そして、また、いつもみたいに……。

「あのさ、さいごに、いきたいところが、あるんだ」

ぼくは、ドキドキしながら、そういつた。

そこはふるい、ちいさなじんじやだつた。なかにはいると、やさしいかおのおじぞうさまが、こちらをみつめていた。

「どうしてここにきたかつたんだ？」

おとうさんにきかれて、ぼくは、おおきなしんききゆうをした。

「ぼく、しつてたんだ」

目^めからひとつぶ、なみだがこぼれてきた。

「おとうさんが、きかんしゃになるの、ぼくしつてたんだ。ぼくがおねがいしたんだ、このおじぞうさまに。そうすれば、ねがいがかなうつて、ともだちにいわれて」

おとうさんのからだから、どこからかガシャンというにぶい音^{おと}がなつた。

「きかんしゃなら、しごとにいかなくていいから。いちにちだけでいいから、ぼくだけのきかんしゃになつて、ずつとあそんでくれますように」

こころのなかで、ごめんなさいっておもつたたびに、なみだがどんどんあ

ふれてきた。

すると、おとうさんはえんとつから、ぶしゅーとすずかなけむりをだした。

「はしろうか」

おとうさんはそういうと、じんじゃをとおりぬけて、はたけにかこまれた、ひろいみちにでた。

「おとうさん、きょうは、とまらないぞ」

「あしたもかいしゃがあるんだから、すこしやすもう」

「いや、やすまない。ぜつたいにね。

おとうさん、とまらないんだ」

「ブレーキかければいいんだよ」

「そうじゃない。とまらないんだよ」

ぼつぽー！と、げんきな音^{おと}がひびいた。

「おまえが生まれてからずっと、とまらない。おとうさんはね、おとうさんがとまらないんだよ」

ぐんとスピードがあがつた。きかんしゃのなかが、まるでふとんのなかにいるみたいに、あたたかくなつてきた。ぼくは、目^めについたなみだをぬぐつ

た。そして、おとうさんに、いままではなせなかつたはなしをたくさんした。

あたらしくできたともだちのはなし、しょうらいのゆめをしやしうさんかパンやさんかでまよっているはなし、じゅぎょうちゆうにおおきなげつぷをしてしまったはなし、クラスにいる、すぎなこのはなし。

おとうさんは、とまらなかった。

ぼくのはなしも、とまらなかった。

よぞらにうかぶほしが、いつもよりキラキラと、かがやいてみえた。



はつみ ひろたか

30才 会社員 東京都練馬区

受賞のことば

物語の中では、あの日どうしても出ることができなかった勇気を、改めて振り絞ることができる。もう会えないと思っていたあの人に、もう一度会うことだってできる。書くということが、僕に教えてくれました。そして物語を通して、新しい人々との出会いがあるということも。だからこれからも書き続けます。ありがとうございました。

審査員コメント

大きな機関車になったおとうさんは、きょうは会社も休みです。おとうさんは、スピードをあげて、山を走り、高速道路を走り、えんとつから煙を出して、もう止まりません。おとうさんと「ぼく」の疾走する一日を描いて、ずいぶん楽しい作品になりました。

宮川 健郎